

7 DTx 流通プラットフォーム

デジタル治療用サービスの安全で効率的な処方、流通体制の構築を目指す

NTTデータは、グループ2社（NTTデータ関西、クニエ）と塩野義製薬と共に、デジタル治療サービス（Digital Therapeutics、以下DTx）の普及に向け、「DTx 流通プラットフォーム」を共同で構築している。医療機関とDTx事業者の負担を軽減し、DTxを安全で効率的に届ける仕組みの構築を目指している。

新たな治療法として期待されるデジタル治療

DTxは、「医学的障害や疾患を、予防、管理、または治療するための、エビデンスに基づいた治療的介入を提供する」デジタル製品である。近年活用が進んでいる食事管理アプリ、運動メニュー提案アプリ、服薬管理アプリなどの健康増進を目的としたものとは異なり、医療行為として製品は国からの承認を受け、患者は医師からの処方を受ける保険診療である。

現在、日本において承認を受けているのはニコチン依存症治療用、高血圧治療用など3製品のみとなっているが、アプリを通じて継続的に診療情報を取得できることで診療の質が向上し、使用する医薬品の削減にもつながるとして期待されている。

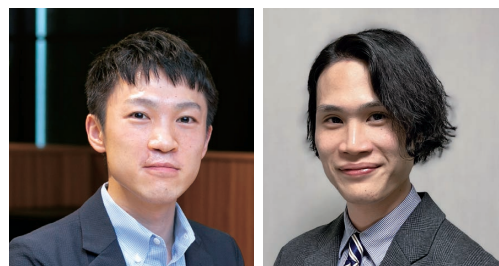
スタートアップの参入も多いが、医薬品の製造販売から、ヘルスケア関連ビジネスへの多角化を図っている大手製薬企業も注目し、様々な取り組みを進めている。

従来の医薬品とは異なる流通の仕組み

DTxは、これまでの医薬品と同様、患者は医師の判断のもとに処方を受け、服薬と同様に自らでアプリを活用していく。しかしながら、「モノが流通しない」デジタル製品であるため、医薬品とは異なる処方までの流れを経ることとなる。

ビジネスモデルも、従来の医薬品が、医療機関や卸売業者がある程度在庫を持ち、その中から患者に処方していくというモデルだったのに対し、DTxは医療機関が発行できる環境を整えれば、処方の数に従って件数の手数料が発生するというモデルになる。このモデルを実現し、広く社会実装するための方法論は、現状では医療機関も卸売業者も持っていない。

さらに、これまでの医薬品は規制の問題もあり卸売業者を介さなければならなかったものが、DTxではメーカーや製薬企業が医療機関に直接販売をする可能性が生まれる。しかし、医療機関に直接販売をするという直販チャンネルのノウハウは存在



株式会社NTTデータ
コンサルティング事業本部
ビジネス&サービスデザインユニット
主任 武長 慧介氏
第二インダストリ統括事業本部
製薬・化学事業部
主任 早瀬 麟太郎氏

しないというのが現状だ。

DTxの一元的な流通を実現する

DTxは、医療機関とDTx事業者が原則として1対1で個別に契約し、処方登録、請求などを行う。今後DTx製品が増えていき、事業者ごとに契約プロセスや決済仕様が異なると、事務手続きが医療機関の負担となる可能性がある。事務手続きの煩雑さを理由に、医療機関がDTxの導入に前向きではない、などという状況が生まれてしまっただけで、医療業界全体の損失にもつながりかねない。

DTx 流通プラットフォームは、

医療機関とDTx事業者間の契約、請求、処方登録など様々な機能を集約することで業務負担を軽減し、患者により安全で効率的にDTxを届けることを実現するものだ。プラットフォームを通じて、各製品の流通の仕組みを共通化し、情報を一元管理していく。

また、DTxの開発に取り組む企業が、製品開発の段階から流通業務に係る部分に本プラットフォームを活用することを前提とすれば、作りこむべき部分に集中することができ、開発負担の軽減にもつながるのではないかと考えている。

2024年1月にプレスリリースを発表して以降、DTx事業者、製薬企業、医療機器メーカー、スタートアップ等々、幅広い業種の方々から関心を寄せていただいている。期待

の高さを実感しながら、2025年のサービス開始に向け開発を進めているところだ。

NTT データグループと塩野義製薬のノウハウを融

NTT データは、これまでも様々なステークホルダーの規格を統一し手順を合わせるといった業界横断のシステムを数多く構築・運用してきた。

医薬品の流通においても、製薬企業を受発注を担うJD-NET（医薬品業界データ交換）システムを構築し、10年以上に渡って運用しており、ノウハウが蓄積されている。

一方で、医師に対して製品をどのように届けるのかといったマーケティング面や、個々の業務レベルでの規制対応などのノウハウにおいては、塩野義製薬というパートナーの存在

は非常に大きなものとなっている。

例えば、医療機関のデジタル化への取り組みは他業界と比較すると一般的に遅れており、単に有用性や効率性を訴えるだけではDTxの導入や継続に結びつかないという状況がある中で、既存の医薬品流通のプロセスとも大幅に乖離しないような仕組みができないかといった製薬企業ならではの視点は、医療機関にとっての始めやすさ、続けやすさを考える上でも重要なポイントとなっている。

DTxの普及に貢献し患者中心医療の実現を目指す

2030年には数十個のDTx製品が上市されるといわれており、DTx流通プラットフォームに対する市場の期待はますます高まっていくことが見込まれる。

さらに将来を見据えると、DTxによって得られたデータをRWD(リアルワールドデータ)の一つとして他の医療データと結合・分析することで、特定疾患の治療だけではなく、医薬品開発の効率化や新たな健康・予防サービスの創出などより幅広い用途も検討されるようになっていくと考えられる。

NTT データはDTxの普及に貢献すると共に、次世代医療基盤法の認定事業者として、医療のデジタル化とデータの利活用の促進にも注力し、真の患者中心の医療の実現を目指していきたい。

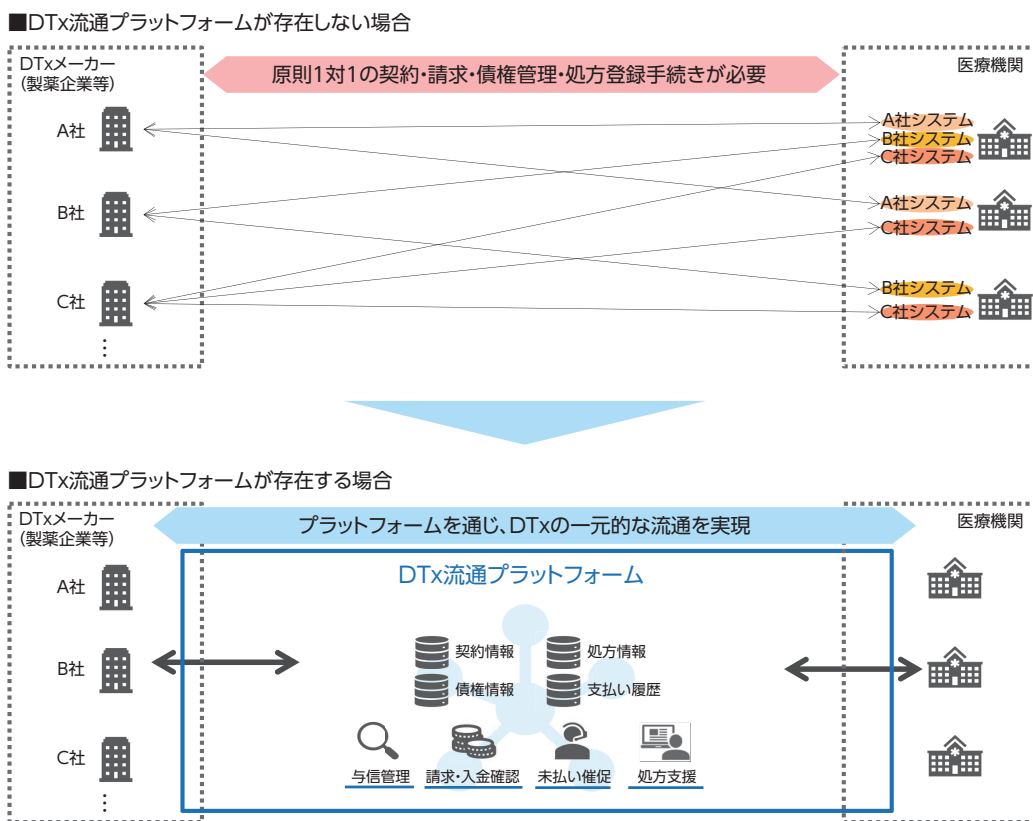


図1 DTx 流通プラットフォーム概要